

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 1 年目)

1. 研究課題

「見えるもの」や「見えないもの」に関わる東アジアの文物や芸術についての学際的な研究
An Interdisciplinary Study on East Asian Works of Arts and Culture Concerning
the Visible and/or Invisible Entities

2. 研究代表者氏名

外村中
SOTOMURA, Ataru

3. 研究期間

2019 年 04 月 - 2022 年 03 月 (1 年度目)

4. 研究目的

東アジアの文物や芸術を解釈する上での共通の基盤の形成をめざすために、その前提として、あるいは「見えるもの」なのかもしれないが、普通であればまずは「見えない(と思われる)もの」にまつわる理論や事象について、従来の分野の枠組をこえて国際的にかつ学際的に探求することが、本研究の主な目的である。中でも仏身や道をめぐる議論は特に有効な指針を与えるものであるから、重点的にとりあげる。そして、様々な分野の研究者が一堂に会し、外来あるいは固有を問わず東アジアにおける多種多様な理論や思想から読み取られる共通点や相違点などを確認しながら、理論と作品との間に認められる矛盾点にも注意を払いつつ、上記の探求と関連する具体的な事例(特定の芸術作品など)を選定し、その文化史上における位置づけをおこない、実地に即した解釈のモデルをしめす。対象とする作品は、考古遺物から彫刻、絵画、建築庭園、芸能音楽などにまで及ぶ予定である。

We carry out international and interdisciplinary research beyond the framework of the conventional academic fields, as a preparation for establishing a common basis to the understanding of works of arts and culture of East Asia. Researchers from various fields come together to explore theories and works concerning the visible and/or invisible entities, which are supposed to be invisible to ordinary people. Since, we think, discussions on Buddhist and Daoist theories give a particularly effective guideline, we lay special emphasis on them. We not only confirm common and different points explained in a variety of theories and

thoughts, no matter whether they may be indigenous or not, but also pay careful attention to contradictions, which may be recognized between theories and works. We select concrete examples (specific works of art etc) and position them in East Asian cultural history so as to show practical models of interpretation. The works, which we investigate, range from archaeological relics to sculptures, paintings, gardens, architecture, music, performing arts, etc.

5. 本年度の研究実施状況

班長が海外在住のため、年間四度の来日(6月・9月・12月・3月)に合わせて四回の研究会を実施する計画を立てた。各回毎に統一テーマを設定し、連続する二日間に一日あたり二本、計四本の研究発表を行うこととした。開催にあたっては、当班の掲げる研究課題に取り組む上で特に重要な文献を選定し、各回の統一テーマに掲げた。初年度である本年度は仏典に注目し、第一回は『涅槃経』、第二回は『法華経』、第三回は『華嚴経』、第四回は『般若経』『維摩経』『大智度論』を対象とした。各回ともまず最初に班長が、当該文献の内容分析を踏まえてキーワードや中心的な概念についてまとめ、その後三名の発表者が関連文物を取り上げるなどして各論的な研究報告を行う形式とした。第一～三回については期待した通りの実りある討論ができたが、3月14・15日開催予定の第四回はコロナウイルス流行のため、令和3年度に延期することとなった。

6. 研究成果の概要

なし

7. 本年度の研究実施内容

- 2019-06-15 『涅槃経』と関連作品『大乘涅槃経』が説く「見える」ものと「見えない」もの—いわゆる涅槃図は涅槃図ではない 発表者 外村中 ヴェルツブルク大学
涅槃会の変遷と涅槃図—東アジア仏教社会における「忌日」を視点に 発表者 西谷功泉涌寺
- 2019-06-16 『涅槃経』と関連作品『涅槃経』および関連する仏典と懺悔儀礼—石刻資料を中心に 発表者 倉本尚徳
北魏石窟の涅槃図 発表者 岡村秀典
- 2019-09-22 『法華経』と関連作品『法華経』が説く「見える」もの や 「見えない」もの —久遠身と 方便身、一世界一仏と 二仏並坐ほか 発表者 外村中 ヴェルツブルク大学
カローシュティ—字形からみた2, 3世紀のガンダーラ仏 発表者 内記理 文学研究科
- 2019-09-23 『法華経』と関連作品『法華経』と楽器 発表者 中安真理 同志社大学
日本仏教造像史と久遠の釈迦の諸相 発表者 田中健一 文化庁

2019-12-21 『華嚴経』『梵網経』と関連作品『華嚴経』が説く「見える」ものや「見えない」もの
 ー 法身、色身、神変、相好、虚空ほか 発表者 外村中 ヴェルツブルク大学

『華嚴経』における「ヴァイローチャナ」とその教理的解釈 発表者 中西俊英 東大寺

2019-12-22 『華嚴経』『梵網経』と関連作品 法界仏像に関する基礎的考察 発表者 高橋
 早紀子 愛知学院大学

盧舎那仏と毘盧遮那仏の可視性と造形 発表者 船山徹

8. 共同研究に関連した公表実績

なし

9. 研究班員

所内

稲本泰生(副班長)、岡村秀典、船山徹、安岡孝一、古勝隆一、倉本尚徳、向井佑介、高井たかね、福谷彬

学内

内記理(文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター)、折山桂子(大学院文学研究科)

学外

外村中(班長)(ヴェルツブルク大学)、大西磨希子(仏教大学)、大原嘉豊(京都国立博物館)、黄盼(中国社会科学院)、重田みち(京都造形芸術大学)、清水健(奈良国立博物館)、高橋早紀子(愛知学院大学)、瀧朝子(大和文華館)、田中健一(文化庁)、塚本明日香(岐阜大学)、中西俊英(東大寺)、中安真理(同志社大学)、西谷功(泉涌寺)、増記隆介(神戸大学)、森下章司(大手前大学)、横手裕(東京大学)、パトリシア・フィスター(国際日本文化研究センター)、シビル・ギルモンド(ヴェルツブルク大学)、ベッティナー・ゲーシュ(関西大学)、ガリア・トドロワ・ペドコワ(京都コンソーシアム)、大平理紗(京都府立大学)、リサ・コチンスキー(南カリフォルニア大学)

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	9 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
学内	1	2 (1)	0 (0)	1 (1)	2 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
国立大学	3	3	0	0	0	0	0	0	0

		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
公立大学	1	1 (1)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
私立大学	6	6 (5)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
大学共同利用機関法人	1	1 (1)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
独立行政法人等公的研究機関	3	3 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
民間機関	4	4 (2)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
外国機関	3	4 (3)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
その他	0	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	23	33 (15)	5 (5)	2 (2)	5 (3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)

※()内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

12. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

13. 次年度の研究実施計画

次年度も年間四回の研究会を実施する。本年度同様、各会とも統一テーマを設けて連続する二日間に一日あたり二本、計四本の研究発表を行い、参加者全員で討論を行う。いずれも最初の一本を班長、他三本を班員が担当する。統一テーマに掲げる基礎文献ないし基礎概念は第5回(2年目第1回)が「浄土三部経」、第6回(同第2回)が『淮南子』『呂氏春秋』『易経』、第7回(同第3回)が『老子』『莊子』『管子』『韓非子』『列子』、第8(同第4回)が「三教交渉」である。なおコロナウイルス流行のため、第1回の開催を後らせて8月とし、以後9月・12月・3月に開催する予定である。

14. 次年度の経費

国内旅費	研究会参加費	開催回数 4 回 国内出張旅費(延べ 4 人)	支出予定額 (160,000 円)
	一般旅費	国内出張旅費(延べ 0 人)	支出予定額 (0)
海外旅費	渡航旅費	海外出張旅費(延べ 4 人)	支出予定額 (840,000 円)
	招聘旅費	招待人数(延べ 0 人)	支出予定額 (0)
謝金(講演謝金、研究協力謝金、その他の謝金)			支出予定額 (0)
消耗品等経費			支出予定額 (0)
その他			支出予定額 (0)
合計			1,000,000 円

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

なし

